

はじめに

❖ 京大の英作文は日本一長い問題

京大の英作文問題は一見長いので難解だと思われがちだが、実際に取り組んでみると、基本的な定型表現の積み重ねで解けるものが多い。そういう意味では極めて基本的な出題と言える。3～4文ある日本語を1文1文に分離して3～4問出題されていると思えばよい。そうすると、やはり普通の英作文の学習をしていれば必ず出てくるようなお題だと気づくはずである。

❖ 日本語を言い換えれば定型表現

基本的な出題と言った意味は大きく分けて二つある。

一つは「必ずしも～ない」(1991 後期)、「～の普及」(1996、2014)、「20 年振り」(1999 後期)、「久しぶり」(2007)、「増えてきた」(2001 年前期)、「人(によって)さまざま」(2006 前期)といったような定型表現が出題されているということである。これらは京大に限らず、通常レベルの英作文学習で必ず扱う項目である。

いま一つは、一見定型表現に思えないような日本語でも、日本語自体を言い換えれば定型表現に近づくというものである。例えば、「多くの詩や小説に慣れ親しんでしまう」(1999 後期)という出題は「多くの詩や小説を読んでいる」とすればあっさり解決する。「前に読んで手応えのあったものを再読する」(1992 前期)は「以前読んで読む価値があったものを読み直す」や「以前読んで印象に残ったものを読み直す」などとすればよい。

❖ ワンランク上の語彙

中には、通常の英作文学習よりもワンランク上の語彙まで知っておけば楽に英訳できるケースもある。「使い捨ての時代」(1990 前期)、「喧噪」(1992 前期)、「手持ちぶさた」(1993 後期)、「超国際派」(2004 後期)、「年功序列」(2005 前期)、「体内時計」(2013)などがそうで、これらの表現の直訳がわからなければ、もちろん意識するという手もあるので、必ずしも知っておかなければならない語彙というわけではないが、語学は多くの語彙を知っているに越したことはないのので、一級上の英作文力を磨き上げようと思う意識の高い学習者であれば、どこまでも高みを目指していただきたい。

❖ 語彙力豊富が仇になる

逆に、語彙力豊富であることが仇となるケースもある。文脈や語彙のニュアンスも考えずにただ語彙力だけで疾走すると、思わぬ落とし穴に落ちることが

ある。例えば、「有用性から独立している」(1994 後期)、「屈辱感を受け入れる」(1998 前期)、「融通が利くタイプの人間」(2003 前期)という日本語を見て、それぞれ be independent of utility / accept humiliation / flexible person が浮かんでいる方は、前後の文脈と語感を確かめていただきたい。

❖ 比喩表現を基本表現で説明

次に、京大の英作文は比喩表現も多い。「目の前の不透明なヴェールが一枚すつとはがれた」(1991 前期)、「場所が主導権を握り、あなたはその従順などれとなってしまう」(1993 前期)、「身体は着いても、心がまだなので、ここで心の到着を待っているところです」(1997 前期)などがその例であるが、これらの比喩表現をどうわかりやすく噛み砕いて基本表現で英訳するかが鍵となる。単純な直訳ではなく、文脈を考慮に入れて、基本語彙でパラフレーズする応用力が求められる。

❖ 難解な日本語も〈英作文助っ人表現〉で解決

とはいえ、難しい出題ももちろんある。「心の琴線に触れ合う」(1999 前期)、「木は命あるものの独特のやさしい雰囲気がある」(2004)、「機能第一主義の無機質な都会」(2008)、「独特の高揚感を思い出す」(2010)などは一見難しいような様相を呈している。しかし、これらの表現も、私が〈英作文助っ人表現〉と読んでいる、ちょっとしたテクニック(と言うほどの代物でもないが)を駆使するだけで平易に言い表すことができる。

総じて、京大の英作文は基礎から応用まで、英作文学習にとってはまさに格好の練習問題と言える。本書では、この良問だらけの京大英作文の過去問を使って、英作文力の向上を目指す方を対象に基礎事項の確認から応用までを一気に引き受けた、英作文攻略の集大成である。これを習得することで一段上の作文力が養成されることを期待する。

2016 年 2 月

小倉 弘